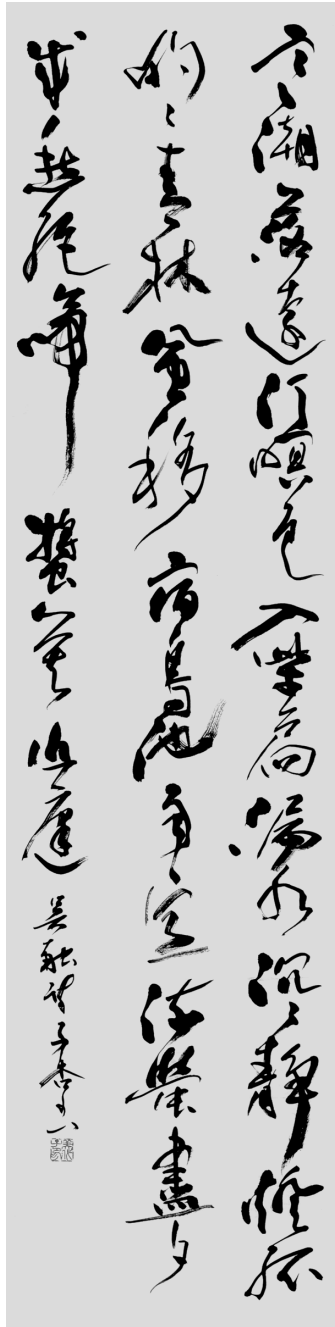


第二十四回 玄和全国競書大会優秀作品



遠藤 子杏

審査所感

第24回玄和全国競書大会の審査が11月26日行われた。今年は例年になく暖冬かといわれ季節外れの夏日が連続していたが、この日は急激に寒波が到来。小雨の降りしきる真冬日であった。さらには突然壊れた暖房。しかし部屋は寒さも、審査を手伝ってくれた方々の熱意と、厳しい寒さに做うかのように極めて冷徹な審査をする審査員の意気込みにより、終盤には和らいだ。

まずは学生部の作品から。特に幼少、中学生は、筆を自由自在に紙面いっぱい大らかに操り、実にのびやかな運筆で力作多く見受けられ、日頃一生懸命に半紙に向かっている姿が目には浮かび微笑ましい。しかしながら5枚提出作品の中には4枚目5枚目となると1枚目との格差が激しいものも見受けられ、枚数を出せば・・といった懸念を抱くものがあるのも事実。最良の出来栄えのものをそろえた優秀のつけがたい作品、たとえそれが2枚でも1枚しかできなくても精一杯書き上げた納得いくものだけを発表すべきではなからうか。

※二月号にてお知らせ致しましたとおり、写真掲載に誤りがありましたので、改めて掲載させていただきました。ご了承のほどお願い申し上げます。

— 玄和書道会賞 —



公野 珠月(高二)



明石 有平



千々岩恵菜(小三)



出井 絢菜(小五)



洪 瑛雅(中三)

ていくことの必要性和大切さを学んだ。

一般部の半紙作品では例年、五言律詩のなかの一節を題材としていた作品が大多数である中、今回は二字句、三字句などを題材に一つの小作品として書き上げ、そのまま額装して飾りたくなるような作品造りのものが目立った。競書の域を超えて美しい作品を造ろうという意識を育む。そうした方向性を示してもらっているようだ。

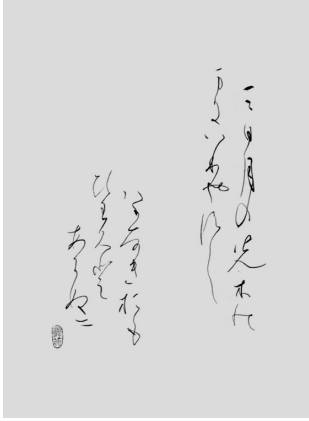
条幅はやはり日頃の鍛錬の成果の見せ所といった作品が多く圧倒される。師の教えをしっかりと叩き込んだうえで自分らしさを模索、追求しようとしているなど感じるレベルの高い作品も垣間見られた。手本を見て一夜漬けて線の定まらないような作品はおいでいかれ、一方、日ごろから熱心に取り組み一つの作品にかける熱量が多い人の作品には隙が無い。

魅了される作品に到達するには不断の努力を惜しまないことの重要性が問われるということだろう。

今回は例年よりも若干出品数が減少した。一人の人が複数点出品する方も多くいて頼もしい限りだが、たくさんの方に書道に対する親しみと興味を抱いていただけるよう一人でも多くの方による競書大会への参加を望んでやみません。

第二十四回 玄和全国競書大会
審査委員長 叶 采園

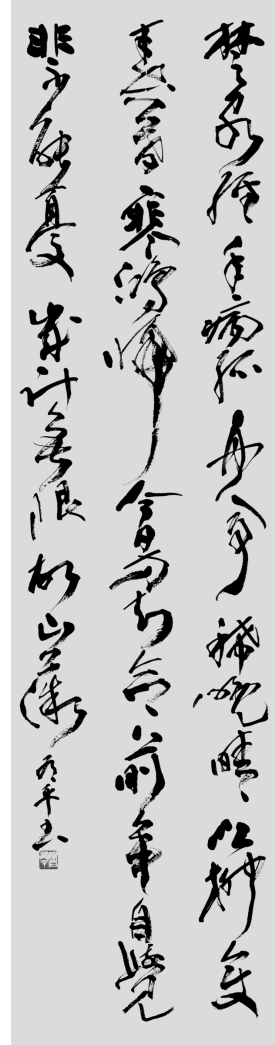
— 春 浦 賞 —



佐々木鶴苑



清水 紅華



明石 有平



鈴江菜乃子(高三)



鴨井 彪吾(小二)



戸倉 凛(小六)

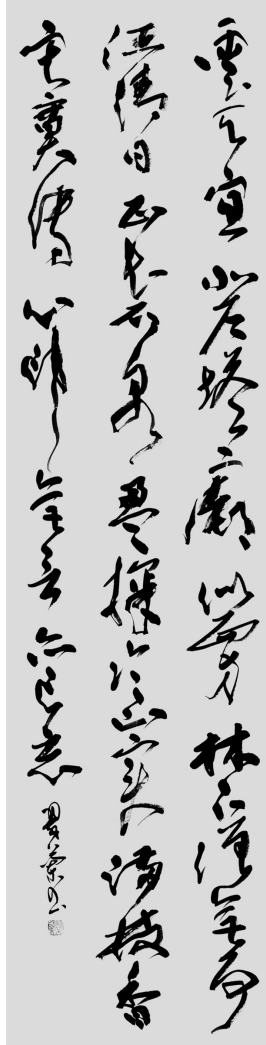


藤原 彪向(中一)

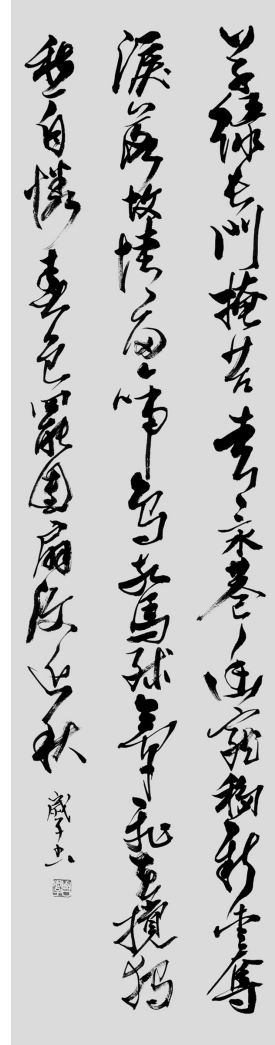
— 玄和書道会会長賞 —



鷹松 昂暉



圓山 翠蘭



山口 歳子



川本 凜緒(高一)



鴨井恵里奈(小四)



佐々木ひすい(中二)



イエーガー沿志(小二)